俳諧一葉集

弐

へ 5
4110
2

俳諧一葉集附合之部一

古学庵佛兮
幻窓湖中　編
坎窓久藏　校

延宝五丁巳春

此梅に牛も初音と鳴つべし　桃青
ましてや蛙人間の作　信章
春雨のかるくしやれたる世の中に　〃
酢味噌まじりの野邊の下蕨　青
摺鉢を荒塗にすることも　〃
むかしをとこ紀の男ぶり　章

朧のひらけて咲くる出の月　章
爪たてゝゆくほし曳の山　青
ウ
ゐすほしものとゝのふる桑の花　章
ひとつにはゆたり住よしの松　青
淡路しま社殿さへ手しのはえて見て　章
友よぶとりのうしひあける　青
まつ波のよせる白浜の楼くに気　章
森の下風木葉六まし　青
古葛原ふかれて道に迷ふなり　章
虫吟やまさに卯ごしあひのあぬ　青
宗の秋うにたとくのまさそとよ　章
吉祥天女をうれれとの月　青

ほつゝへみ瑰瑰のてる山かゝり　章
松のほうしよゝひくく耳たふ　青
大黒に袋のもあげかるひく　章
かすみまうちろき天笠のきぬ　い
二
小町の雪負女一文ヶ撫をとく　青
風に進退を制す牛飼よ　章
瞞の腕をとり京通ひきれ尽て　青
うみあけのた勤うしめしの中　章
炒せはしハ石納なかとくちのひてし　青
来の松山葉漬み　章
手放の徳ふうじんへて掃の隅　青
雲隠まひてくへしくゆる　章

たゞ見てゝとゞまるは六許の　青
高雄山そでのくゝ入しは風に　章
よしやよし二ゐの袋の消る事　青
千里をうけて寸まではなれぬ　章
秋の月又ぬ古きの札の辻　青
きゝん事の頃町し引まき霧方　章
三ゞ娘悩の右眼中眼其外香　青
人足あ焼ハ山焼もはり　章
谷の戸を打て起して觸流し　青
読みよゐ小路うらゝよの春　章
花をふみてすゝめハ子の出けの前　青
上野下谷の外にまこと　章

隅田川ゆきかゝ霧に朽果て　青
襤褸毛きせし法をすゝめくれ　章
まつ何ゝハやまぶれしは何はむすさ　青
もじとせに隙鬼子人数の月　章
大学書ほぎ書を記す取さて　青
手伝の掟ハの子共頭ハ仍　章
古も木千三百りに晩つゝ石　青
比山びきり信に料年と　、
三不二の嶽つゝしく雲を割て濡　章
人穴ふてのおくや楠の庭　青
蝸やさ角の戦のおやまのふ　章
山椒つみやかつ椒なりしも　青

小枕やころしぶし八つよつし八　章
甚不まうらい女のよ八太り　青
うつり路の二階八邪しき乃れと　章
かしこそ物色言訓み松　青
とうふつきく衣物の橋をつくうし　章
能内法師か宗のとし　青
思つけく色は是もや傍つても　章
てきさをちの言つる眼薬の肉　青
飢饉とし弱りくくめる秋の暮　章
多けく八修竹萩の上風　青
二オ
一葉つ柳の髪やさけめ寄　章
ら様も盛をすきりけし　青

お客の身八しもやせのましめ余花　章
時雨律し至むのし浄瑠璃　青
抱くれさうてさくちら山端て　章
松吹風や風のる盃をのまる　青
君らうすかみの二布の下紐ふ　章
喜うし秋を産妻あくろう　青
月すてく草履の花緒中絶て　章
河内の名く乃うふ飛石　青
四つ辻まろ川原の里も浦さとく　章
浪千し芦垣住つきの　青
時そ花入江のけれ中陶り　章
やうりる一流松手蔵かき紀　、

名

いとさしハ魔法をまなひし夜の尺よ　青
七りとひくゝ入おのあるゑ　章
宗碩三井の古寺泊りけり　青
落さきし縁しもの乞ち哉　章
階ぬれし月より八月より　青
湯立は釜も西へ谷の雪　章
既に祢みしてはつるきぬひとり　青
白髪翁ハ陸奥よし経て　章
つくしと命をたとへ讃岐山　青
こけ入新院ハ小御所の錦絵　章
思ふ頼ハ狐のあるまじき子とも　青
比まつ年揚し頼川番の寿　章

唐人もみの服うつされもなく　青
十三
古文古実寿のつまかる秋　章
酒の寄たまけ越て白雲飛　青
了物たふしや人のまとや　章
新のよまき秋の大木大間屋　青
誇をひつくきく糸ら夜より来る　章
拜えて日本の若菜やうけぬらん　青
物ら発の玉をつつめてのれなり　章
花すすり之禁の里ハ十園子　青
なる坂こゆき八峰のさくらひ　章

同年春

梅の風俳諧国にさかんなり　信章
こちとうつれも此時の春　桃青
きやうんす霞のきぬの袖をえて　〻
けんやくしらぬ心のどけさ　章
きてしこに中は三方むくしまはす　〻
うき世の雲みもそけゆくさびしき　青
海へしては峯の雫に月すごし　〻
趣向しらへる松の白露　章
ウ
いつの年漁翁にかへる秋の風　青
寝すに大用も時の羽衣　章
うつ蟬も十しの山に琴をひいて　青
青嵐ふくひとよぎりふく　章

松杉の本尊の庵あらはれ　青
香撚桶きよし村雨の空　章
夕陽に牛ぞ帰るさの雪の雲　青
老子のすむなる山の端かゝる花　章
寄生のむかしの藤紫に咲て　青
桐壺そく木にかゝる枯葉　章
猫のかたみのつのりすみやなかに　青
打五六杯こけしもる月　章
古里のふるきの心の春をむかえて　青
志賀山の春ふいてふく風　〻
二
さゝなみや二の丸ゝ袖をさえて　章
ひとつて波をあし原の末　青

ゆく秋に池のつきまる石ひとつ　章
玉子のおやもちらくく流　青
侍から宿のよしすんかまそれ　章
上瑠前よきは数杯　青
付ともけるもひよ君の居すまても　章
觀音寺はのてのれうらしや　青
寺中より大名御れハ断人あり　章
柳ハみとりつけハ羽緒　青
吉帳て様点をと引新霞　章
火鉢をともし治るのうて　青
うるめのゆみうつ晩とてしも浪の月　章
河童子のいけとり秋をもてしむ　ゝ

うそ寒きけハそよさハ萩の声　青
地獄のゆかへきしもゆりの家　章
飛鳥井のハこくらさまえ上り　青
延寿寶ほ花田の長たし　章
酌瓶とり酢やまかすきの手かんと　青
亀ハたちまち下女に初ハ飛　章
糸好の憶佐根への御使に　青
白むくそくて粟五十石　章
御存る話ともうひとたひまた　青
ぬすいは名前も芋の秋風　章
床ハ海新鮮人の宿の月　青
虎の毛こんもいのれゆくなり　ゝ

三
くろうみの薬地の扉ちとをまんで　字
筆まえ阿くつる秦の法くそ　青
釣をまみ徐福が似をのうて筭　字
すゝ蓬ひそつ乾坤の分　青
瀬戸の玉金輪際をかゝぬかぬ　字
弁才天かす鯰さしくれ　青
二月ほとの後ふうぬ海とのとゝろ　字
その駿の不二す足斗の山　青
かんな眉たいけ川ろうとふうえて　字
大よし成佛そふとあの法　青
静み浄府をやくれの消　字
龍田の紅葉皇席四五丁　青

むかし内宮をくらひの二そとす　字
人丸の表風さうくふうり　青
大火事を袖けのふふをか恵　字
すくしこゆる玉手の松山　い
三ノ
日本橋ちんを一事て緒ふうし　青
才くるをしそ作文の源令　字
かいつのみそるのうら拂ふ雲の営　青
説字ハふくつさ寄とふうり　字
信不審節のまのいふまの中に　青
何とて松そまのそ尺ゆうん　字
くす拂とも常をすつされぬ時の雲　青
海内の玉をと焼のくし志うく　字

物語作者白氏とよばれしより
すゑ宋の秋に錦と記ゆく
たゝみそへしも内侍所を見る月
のくまなれはけしきもやさしの青
衣屋も既に弥勒の花待て
かくの如く浄巌を尚存の書
先橋やあんとうけとる一字を
天下につらぬく虹のつくなり
其の世陽炎川は手本を様くて
日備の札に鬼魔めさむる
猶さら歓安全にあらしと
並也は一みよしとなる字の道

書　字　書　字　、　書　字　書

人としては四書んや親の五常
教にもより心の竹　若
いきの松ひとつり文字の百まても
手枕の色を中継に尺ます
約をり庭訓今川童子教
まそこみそえ二条左京つ
前の月燭をともすひらきなり
浮ふ陳ハいふるる横町の家
上ゝ新葉義理とあらん切てなも
大根の情しらうく絶なり
顔花式本草を読誦する
南蛮いま算術未だの財

字　書　字　書　字　書　字　書　字　書　字　書

蕊に蛸ハ乗て浮きたはむるゝ　亭
とくり矢二筋まかせしの先　青
軍ハ花追手勝負をとらみ合　亭
手折の何百きさらぎの光　青

同季冬

何となく霜きの六さくは稼汁　桃青
雪さえて川に足の気ぞもとき　信章
居合めかけの玉や影きらん　信徳
柳糸名亭ハ風に藤原　青
お座の御用もいつハ池の坐り　章
御免さこまでおかし八餅　徳

碧海の底まで行く内まみえ　青
更るよはし小夜の霧　亭
琴の音やよそにはやしき萩の声　徳
難波の芦ハ伊勢のはまおぎ　青
覚しきゝ浦のむかしを忍ぶらく　亭
かゝるも小船や袖すゝ浮ろ　徳
物語もの理しらぬ家あるき　青
千躰仏五数られしきの色　亭
寺の庭に神に花のさかえ　徳
みしうなるゝ雅の眉つく　青
糠打はらうれた[illegible]　亭
参り積つる縁談の功は　徳

露つきし坊主も秋やわすれん　青
手一休に尺をさゝやの月　享
花の山の朱鞘を踏す夕霞　流
いつやきつけ其岸の山ふかむ　青
より野川まで流るゝ水菜洗　享
二
代絵より野雲分ゆく　流
風まくく杉枝両手割かもん　青
恐印揃の紋のよつ蔓　享
双六の菩薩もここに住まば　流
店先の踏をすゝぬとして　青
月の出て鳥羽金谷の三瀬川　享
かけ尻流む渕ハ此うす　流

小蓮團子大はのうちみ餅　青
孫の飯様湯とかりし中　享
二秋詠きらかしく暮ぬる　流
月ハむかしよ親仁友もちぬ　青
茶むかれてめをきりし代　享
胸算用のすゝきみちる　流
二了
猿屋も米の秋秋濱風に　青
家持ちなくも淡の葬也　享
何かよ死て石魂鬼飛ぶ　流
古いかぬ花の草葉にけり　青
遠うきもの人まつひるいへかず　享
文正うふちを是後ふりなん　流

今ハまだ新枕とてもくらまぬ　青
物すさまじき車のおとゝや　李
行月の後ハ萩の二股子追こゝみて　淡
何をたし句ハ猫の月の露　青
月影や夏の琥珀を曇らん　李
遥えゝらもうつゝ一すゞ習す　淡
法の舟ぞうき見に浙江荷て　青
冬路の馬を一とうきり思く　李
三
上ハいゝ越の老う山うまい霞　淡
百菊名所梅のほふ有り　青
紫うし棹そゆ三味線の涕けり　李
字隨極めて柔所摂集　淡

掛気も小町が方へとはぬまい　青
らんおる朽木の枝を霞みぬれ　李
小秋ゆかし虚嵐てハ宵の月　淡
身を入花ハうしそすらり露深　青
海晋や生れ浅きて山の秋　李
さらり柴人がてらの葉に色　淡
襟帯にそさらハゆとぞ惑ふ　青
らん住て雨夜の乞合羽なう　李
飛のり北宮かりしとや附ぞ　淡
森の節風旅てハあんる可　青
三了
二　枝孫太ぞつとひしきと隠れ　李
三　宝の山を引つかう つて　淡

莵代の古気買らしと呼ふなる　書
質みあれの下ゐ羽衣　章
田子の浦浪うちよせて扇哉　法
不二も尾さ持て江戸の渡舟　書
方八海入日をし浪ふうしろ瓶　章
松か根まくら石の孫とる　法
浮きしや化女の秋千へ家ちら　書
尾樽の樽う伊の月　章
千鳥を嵐の山おし行よ秋　法
浪まみよる突きりの雪　書
衣裳孫の姿うちの寸松の風　章
白ひきかへる孫く白藤　法

名
孫の声一声二百まで龍て　書
氏ゐ八さ仰ふめ下八木久山　章
雲命の孫を行宮千秋よし　法
幽霊と朱く浚め沈めのふぬすみ　書
世孫もの橋の上より篇きてき　章
孫く合世数の雪をまみ空　法
祖父祖母たやおさや若とそ　書
鼓をいうしやみ能まえてく　章
米俵はとを孫て扇子のけ　法
本質の夕風秋三郎　書
章諺天と志けし体ふ安め御　章
かさや我をとそむる川舟　法

もしまこむ追手鳥ある波の有　青
すハ後人とまがふ鎗の声　章
物の跡振鼓すゝてゝ漆房　徳
木綿子の尾山の端の雲　青
人形の秋の一ッよふけ取ほよし　章
千まり子かるゝ芝居淋しき　徳
は箱菜を雇ひするるの七ッ鐘よし　青
行よし結白浜こしの海　章
湊浪深かひろの身とと也　徳
神代の末松も入の春　執筆

延宝六戊午春

さぞな都浄瑠璃小哥ハ爰の花　信章
かすみともに芝居人形　信徳
青ハ西吹ふ山より書たてゝ　桃青
かくりけの瀧の兎八のむほと　章
有つさる荒手浪の数ハ舟　徳
阿よまゝしは旅友なち　青
三百はきひしき旅子のかる　章
松を津援千乳金の秋　徳
手うけ土の古臥のやうに荒しく　青
思ひのまゝ川ふゑ光ころ見し名を　章
本跡とつはつ名の薫のなふる小　徳
門ほとしとなるくちなし　青

随田屋進退もかをたのまれて　幸
二人は若き浪人小姓　波
作りすてちきれゝうとも此日足　青
浮ゝけやつけ挑たうの母衣　幸
心たゆみさくの渡くなかをふ　波
浪せき入る大釜の洞　青
岩燃峰や嶽の底くさゝ清き　幸
弦枝解のおゆみを砕くる　波
瀬の月清妻歩の沙振翁　青
膝の内侍お家の秀　幸
二
眉を取袖ふさうする花笠　波
朧も八無常持たり　青

踏の底入河の沙手をけふく　幸
のり直しと舴の竿とれ　波
山うけて精進落く松の赤り　青
三十三年秋たてる託　幸
年帳や後成仇のあすうけて　波
宇筆清河小僧新發意　青
いろは韻桂之山とあつらへ　幸
やらを培猫千年ある修行秋　波
新ひもり長月清の宇根あ　青
肱の堂此板ものゝ捨一枚　幸
駕輿きちとゝる峠の車や　波
まよひ子此母縁さめけり　青

二

傍らを人しいのもしと愁ふ　幸

悪鬼と来て姿ハ千まし　池

正ろうを恐れさるものかなう　青

うにむまうさしてもよきとく　幸

おハや東叡山の大晦しき　池

花のさかりに町中をよふ　青

青柳の髪ゆひしやれ　幸

商売手わつ物陳ふるびなう　池

赤ふし子を嘆きるひの性悴　青

氏意ゟ明日雨のみぞ婬　幸

恋のたま雲れ降しておちよけ　池

浮き雲や使風の玉幸　青

三

心中は山林竹木猶きるてし　幸

赤壱の扇を菩提和の月　池

十才の和尚のうら寺秋ふけて　青

孫悦ハ一つきさり清やすむ寿　幸

葉のいと狸の店の風涼し　池

そこのものよる順簾のきみ　青

光の剛あすわ物得し人おほう　幸

肴さけの思ひは性こそよし　池

うき中ハ一つ年きうれて弱しく　青

家しの中すくす病汗うつて　幸

志ぶいお大夜叉の書おまきて　池

鞍下儒正床入の山　青

若衆のさかり流行て八百屋吉三郎　幸
かつらすゝきや右近なりけん　池
萩の月橋の精ゆかしく飛て　青
すそも山も悉皆成佛　幸
三丿
天性の眼の光り陽の珠　池
撫㮣の光り因果すふそら　青
をのやとさ夜すにゐるの里のもの　幸
さきうつとして十発目右こ　池
大八やちのいきの思ふらん　青
日傘をとめして冬の日の宿　幸
山雀の柿拜子尾すりけ　池
青峯の月白翔すさて渡く　青

宵宮本宮のうみやまとの手から ん　幸
よこ見おかしする谷深き闇　池
山高く酒舟隔るゝ東さし　青
濁江の冬より種方も飛　幸
白魚し花の雲間の徒波みる　池
兜頭巾の鶯いもふ来　青
名
琵琶ともかくはふるみ引きゝ　幸
山まさ山や三方の九郎命　池
第五殿當世千年や人見てなや　青
松風蔭ゆ澄浪恋ゆく　幸
古物の之絵の芸を並る名夜　池
楚楚のかくこくし楼閣の秋　青

邯鄲の里の新花月にて　章
よくしれへハ今ふと思へる　徳
するよう十万億も鼻の先　青
糸からくりの守武菩薩　章
音楽の小唄三味線あいの山　徳
四竹さハく仏のおく浪　青
姉流て御伽比丘尼の仰ても　章
法ならてやさしの仏ましま寺　徳
ゆつりきし黄金の膚こてや手　青
小娘みしのよの草鞋はり　章
旅枕泊くさやさし嫁られん　徳
鰯く編のちきり焼ても　青

さのゆきそりはくし汁のかけ情　章
連理の箸紙のよしを打て　徳
実や花白糸てさ焼筆す　青
返ちく帰る雁筆の月　執筆

同年春

梅の花も蛸や古郷のはつり　信徳
師く雲を百舌里の声　桃青
峰よきうの字難を神さく　信章
ふ人力の朝風さする也　徳
熊つのひもの/くハ方のうちすくせり　青
ある木を啄ふ神のうりの帝　章

墨の繪萩の下葉もうつろひて　風
尾花の袖に鏡かけたり　青
ウ
ぬけんしいのちる風の末寺吹　宇
丈ハ山伏法士みよひ哉　風
一念の鐘も兼さし七まとひ　青
かしらハ鬼の穴師いかしく　宇
跡ふのり侍をおよりよりかう　風
弥ぬいのきそらえし猩めり　青
晩くしこ袂の紫ややゆつらん　宇
流石こそのれすちんを引尺酒　風
骨もつきし恩ひ笠もまし良かくし　青
之かうよう合う様ての紫　宇

夕露の小風にえも流す水の月　風
本際さしきの紅葉うらしく　青
花千鳥河きらんをはしめて　宇
獨りつてのえし露も丸ゆく　風
二
了津が借金子で陶り多り　青
勘当ゆるす二月中旬　宇
釋迦殿千法式讓りすらん　風
八方館歴評古今新り　青
絲張や十方世界のりれ鐘　宇
九いのら八本去の鐘　風
いかましの塊環飛み走の秋　青
らほくぬかしに枝てゆく月　宇

弱とめくら話もしてく秋の声　沾
東坡か小まの外もの一むら　青
昔男石すりの文のよはくり　宰
獺子の家木残魚のさふすさく　沾
去用志れ山も甜代の青行くし　青
谷をゆく兵々算術のてまし　宰
二
梁風光金相州に投柁は　沾
吹矢をとれそ黒き漆に月　青
秋の花湯の菊花もそゆるねそ　宰
まり出錦むし曹ろかへく　沾
恋草をきて光しまつのれて　青
千葉手に情人やなみ　宰

本銭色は粉なく鏡くすむ見　沾
ゆんもう行に紅尺のきるる　青
出やうまし安宮斛のうゆる口すす　宰
松江の海に茶店す嗅　沾
めり桶に鰻のころをつみかけて　ゝ
平月白うちむくの足鯛　宰
花すうゝん我のおれ藩うまの　沾
父大勝の金つかれ　青
千花をや十二ひとくのうゐす数　宰
三
笈の中より吉山の月　沾
小男なる麻の素をとしれ乳病の守れ　青
仁儀の松鶴むすし昨す秋　宰

関取の掛に突ろ手は弥　は
火付の詮議と徳にくらん　青
本三位孫もも張るてくさく　幸
貢の茶や館おこし而る　は
かさく写手難波の梅は兄弟　青
袈裟かけ紫衣の喜　幸
見徒めくし陶の永翁そめ字　は
澤能きり茂す橋の右水　青
路もの手中の盲花障子引きける　幸
無のやころさ神ぞ来るかり　は
三ヲ
買うて見るき縫ぬ衣を付のけき　青
以川の大寒七ツの湯一堂　幸
物語名の三味線四郎三五郎の　は
地獄やふりや其足破りや　青
小袖めくる段の枝はたきむすさ　幸
滅金の鳥銅拍子の流羅王　は
まる根木て作りまる神楽　青
岩戸ひらけて餅阪の見世　幸
踏の文字一分も呼さき定りて　は
控よかくる六花の月　青
秋や業のし二代目の花乱むすぶ　幸
よろひ般若踊一面露　は
花の枝続きし髭きりおねて　青
丹し笑れ厳人冬　甘草　幸

名
まゝ露ことひあたるらす暮雨　述
秋ろハこけろハ足ぬひよろつく　青
良志はし下女としの戯ひ斗　亭
恭おられの旗をもろひの手　述
酒桶手引等の一句志見されて　青
情以ハ人そ売くらし　亭
来そへうす具破れさへ宿も外し　述
思ふ手吹経る来ぬ秋数横　青
思ふこし爪の先なと心ハあらす　亭
志のふるてられまくり点とろ　述
惑弱し内親王れ俳でと染　青
乳母さくはし〳〵ハ思ふの日の摘　亭

疱瘡の神思神ろくもし望の月　述
ましてや雨そ張具の露　青
霜早布の衣装をひきとのへし　亭
松をいく代の妻祝たれや　述
小渓の花を眉手ゑめれハ　青
手れこ枝を洗ふして一手ふる雪　亭
火雪たてらを諸てひらく宴　述
若菜恩おもて本所の末　青
江戸の末ハ近寺以米の田とかや　亭
謙白るもおもとろうぬ力東　執筆

同年秋

於四友亭興行

須广ぞ秋志賀奈良伏見でも是八　似春

打のしの浦さしのへて月　四友

沖の石玉屋か袖の露されて　桃青

足きしられてや灰の露しむ　〃

山おろし小紫のあけぼのさらさとふ　春

まつりむこころもなきあめくひ　〃

甜海苔ハ廉なるものかしつて横さく　青

禁せて篇はつくらめ油く　〃

ゥ

めをさく人てし三笠の春や嘆ふらん　春

火付の咎はしらしへにらもしかり　青

芋雛の風公儀より烈しくて　春

御意いうそ白髪の鉢　青

手まだ中新に成てむさうなりや　春

洲崎の松がひとり狂言　青

走りちし素浪人の行迯を思ふ　春

淀の気千撥つよくすらむ　青

又や来る風呂門におれ物もらひ　友

廟前四百八十年　米　青

芽吹山之されて武士の世なりけり　春

浪こす岩をきりてのそくまの　青

花の海有の松風秋の供そ　春

春　楊よりこそ女房なれつる　青

二

血の気さらしみ幾るの春の庵　春

腕のかゝりてさらすや　蔦藏　寿
おめしをや川で頂く手香爐ハ　寿
時雨の松は針すきをよふ　寿
お袖は手をひまへりしさまの了　寿
霜寄しの月ハいとしくてきゝす　寿
様子やふんどしはづして秋の風　寿
芦の丸屋手ずつきれりんり　寿
海よりうかれて湯ヶ浪の花と　寿
さしぐの領手代行戸のしやく　寿
甲斐の根や次第の林に入るハ　寿
日上人に新てし行ありし　寿
尾張の火をもらぬ露に小袖かえて　寿

二　神代の嵐まよりまく　寿
咲めれハ荻原との了影峰や　寿
風の手藤のめられ笑ゐ霊　寿
お使手行ども秋の果和多不　寿
二万根とすく文第の寄　寿
為の月中ふりや錦をとゆすふん　寿
既手よし革の合戦彼のもて　寿
色々うさまよの花をえしはゆめて　寿
てりちか付を男をあゝ　寿
冷食を思ひ一口手喰てかり　寿
見生滅法生滅め板漬　寿
煩悩の鳴をとさんして棚さらし　寿

寡むすむすふ色ハ残嫣て　青
ロ嫁の花は散りやめく右印　素
ふりまきてく都をはなれ山吹　、
三
ひよんな志宗出かうてや帰雄　青
あちこちくしに通路の雨　素
お情ではかりのほとの木まてとそ　青
祝ましはつれけてる浪人　素
去数の宿まり雲井に成んとハ　青
菜ちうのひすし風客まちまく　素
幾月の中松るてくや住ますん　青
とくとも岩根は下女八くれ　素
残清の波気のれをたすぬのこし　青

ゆふかす情を投てくみよる　素
先衣裙の秋すくしわて　青
哀し引の行く星のこのいほ　素
なとしくと天の戸ほその蓬の月　青
三
三幅を正く稲をむしり秋　素
路のとし田子海る謡田川　青
山もいはいくまり粉木の青　素
淫婦の江ふきうをふ陸里　青
年く都うと塗さし仙境に入　素
行を桃灯持や手ぬめしん　青
皆のそやすまさく枝つし草履さ　素
志かそくら飛武法の礼お門やくく　青

ゆきを肩にかけし仕合　素
風に乞白雲常をながむる　青
秋風起てもゝよきす棒　素
拿遠をも月のさびしくハ鳥に　青
尾を引すりて森の六箏　素
御神鏡明花ハ哉のみ　青
つくしそだつ手まそ飛り　素
名 排けしる二口の玉子かゆうて　青
うちやさ度ふ西のかゝくと　素
雲陰に伊勢の酒樽もお流し　青
ふみ石の中ハ十六　素
山伏り硯に墨の以かて　青

いろか道玉けをいてや此友千　素
物わゝと書の西よ舞りて　青
星の河れ古を流れけり　素
古閑の六諸一足や踊しゝん　青
すゞ翼おそしと蹂ゆりき千　素
秋の霜覚火入とさけく卯まの六　青
悋拿の袖に月をおもる　素
思ひ後れ常の妻戸をつまへし　青
空嘆眼にくとくゝれ　素
ま 彦情うつゝきしき天明まの　青
黒くめうそつやうらひよけ八し　ゝ
追剥の流そ蒙めけと歳　素

嗟嘆鵙や吐息つくらむ　素

千手の宵宴既に打きゝて　素

折ふし粉の夜の丸はく　ヽ

より金の花郭に素のゝ飛　素

山もこしまみの声を秋をおわ　桃字

同季秋　桃青

尺鱸をハ浅れハ尺鱸ハ江戸の秋　四友

桂の帆ちしら十分の月　似春

きのつまごみをとへす。両岸て　ヽ

山ハ跡も霧よわも初り　青

忠厚え家多し場ぞと人や富　ヽ

うけさへ何しの備大将　素

備ふ定鰍魚鯨郭のくし　ヽ

安ハそしみけ千峰言うしく　素

ウ
隆虎のえ報しる雨雲こしい　ヽ

神し結さもし松桜る菊ゝ　素

金獅子舞拂ふとも千代の秋　ヽ

みのかれもるお屋一字の月　素

木綿菊山ハらしるよ出禱　ヽ

鷺ら紋ハ木色の麻衣　素

着と墨子仍をとうりみく吟鳥　ヽ

賞尺ハよそ吹森の末のりし　素

杉様を手浮の桂の大さくらいい　素

長老のしとね見せてゐつりかゆ　寿
供養はするおれの袴やひらひらと　去
霜もの下ひらを箒はまうつすり　寿
花のまゝを嵐山やまよりゆく　去
宗鑑のころつよふもふは　去
二
白砂の礫手まとへつく踊る也　寿
子どもを枡溜ゆやめつく泣　去
寺の中よし定家爲行清きれ　寿
曇らぬ後の名の月　去
八百年佛像の光あらたへて　寿
狸のこゝろちやしめ来寺の秋　去
狼や香炉衣手数珠　寿

猿等く信正ぐ谷　去
一宮寐覚ぬ踊りし在刀の紐　寿
雲ゐにはく波の瀬ゝ情　去
ゝ公やすり切果て飛おくる　寿
湊の似をとうかきの行の一村　去
猿を挽き陶りし経年よの　寿
妙の経々綱の大きの緒もむしく　去
二
とざさらくをまね桔梗やずかれ　寿
いさまきしく人をうつ物やかし　去
猿の数まぶ盞旅くれも後かて　寿
蹈哉朧に又ちよう川　去
おもくてくかつきハ霜かの花すくと　寿

款仁義説法ゆかしくほと　素
藻小紋の羽折ハ誰か染し　専
法よしれ縮の夕暮山手入　素
菅笠を木綿の輪やまとう事　専
紫蘇ハけれとも毛見を始ハ　素
紙の骨いくつも隠し里の月　専
又あはれ遠し九山の色　素
浅葱鼠の東花ちりて　専
三
うすみの皆つ稲とむかしさ　い
立まや香掛付てやつ肉干　素
穀行御出きて如しりて　専
清僧まてありくさまの小屋京　素

清く長齢大松　専
世を宿先をとりけんも花あけ兆し　素
茶をたハ未来おさへ懐来山　専
因果ハ実拝の世をしまくらん　素
善男言罷し説とあへし　専
又うす孔子字ハ右二郎　素
みすはえのハ前すお髪　専
不心中案すましハりて何のきん　素
君か情篇系おもて何もなう　専
志のふ服ハ取まするる室の月　素
三
秋を通さぬ中ハ竹耳口　専
寂滅の貝ふかふえる初嵐　素

石川めある山本の雪　青
大地震つてゆく龍やのほとゝむ　青
長十丈み餘あり々り　青
かりほとの橋板高く見えるして　青
魚外瀧あふり氷包丁　青
ぬれ桜や小手あれ八千盤也　青
蚊蝶こほれて妙雨神きん　青
六義ゝ伊勢の山み雲子只　青
河内八生和よゝ此秋風　青
きられてそ餞匙ゝほう神の春　青
魚そ溜ふと絢との千す月　青
拵まのきす盗鬼花もあし　青

名
素半より花瓜八し　青
新花み深泉あそのちうすね　青
代八方沙幸めつとし　青
何たするのうら三郎大納言　青
たゝけ狂山みよし娑羅に　青
口香まそ出頭柝ゝ化ようゝ　青
うすのうらひより赤山ちんとし　青
羊なおつゝやよくのはふん　青
菓子釘ふ粒てのむ　青
広手構の華麹ちうるう　青
識かい焼ある峯み回弘　青
拝一つ等民られと当熊す　青

けんどん蕎麦や山の端にまで　東
小半の亭主酒さす月　素
床平沈む歌学の露　東
凉風も山雀鶏かくれなく　素
かしこうりは天下おとなり　、
店ハ只物すさまじ人形浄瑠も　東
海士の業しは新のてらくに　、
はだか嘶きつ火ではうて秋をまつ　素
八百豆腐あさともあらし雲　、
西瓜新枕ろし大根畑なしさく　東
あかのくゞ鳴子すまむ秋の月　素

同季秋　春泥
のまれたり秋の大年江戸の秋　似春
絹のかゝきも金は月　桃青
菊やとの霧ふかしき所縁そて　泥
涌舟は揖ハ打浪こえす　素
雁のおもしいそくのしれ松の尾　素
と作りやまりさ仙境ヘ入　青
うそうき家も雲の上まで光りけ　泥
いつも都高し　素
浄所うつす千お浅ハし　青
はしよの行き海の村とよけ　泥
むかしをみきづる女の恋ほそひかて　素

釋迦にまみゆる此宵のうしろ影　青々
水作りし人能行当世の降の春　湾
鼓の二つまくろき寺も植付　喜
小笠原も見え来秋のしとぬ百　青々
兜こしくさとき生猫にして　湾
天も花に妻の錦粧かけて新　喜
飯のこゝろみ此まゝにあらぬゆく　青々
春の霞む猫は都で助かる寺し　湾
廻つ以のこゝに学は行くえなん　喜
萩の花まだよきよ葺此かれは冬　青々
金輪際よう島山の奥　湾
毘沙門此辞の去りし金の秋　喜

紅花の前の景こうつ月　青々
巻き香八つにやさしめらん　湾
去年文に素のれし中ても　喜
菓物枯れ近う駿とを遊して　青々
古川のくずれを見ずしや　湾
気をまし八つ此二けんの教あし　喜
日待に来さこの山伴しきれ　青々
やすらや秋も夜明けぬる国党すまるちやすき　湾
ほとの川こてすの白砂焼みえて　喜
内裏にまゐれ此當やまれん　青々
松はまのまる入る花春風　湾
花は紅緑は降りの長縮きて　青々

𩕳そしハきむくゝらひよまの都　春

同　似春

まく葉より紅葉家ゝ旅さきをつ　春澄

野とを越しては俄なる山　桃青

朝杖すかゝる月の新酒ゝ　春

庄次ハ肩をおりつなり　澄

系よそく志ぬ木ゝのめる秋の風　青

天下一生田絵さて多能　春

ウ
流る袖を読の可けて尺八や　澄

やよ郭公天帝のきさし　青

笑ふる紙不変不易くまた恋無之　春

詠るゝ身のよしくハ古今集　春

むかし根子もとの裸さゝのくるし　澄

あの風呂の庭ハ龍宮の春　青

出女が玉依姫ハこれとしぬ　春

神代もきゝのすむ百文の恋　澄

霊宮の枕草子をふしおみ　青

あかの帳紙首寺まくら　春

ミる中比傳者一人の月にて　澄

我ハ庭畑無畑の秋　青

二
此の若をつゝゆれきゝ阿字の郡　春

とろうゝのかみすてさむ新萩　澄

子の袖の蓆も髪と生なさ　青

小町か果は女方とも　春
恋衍語ふまんなるも指さす　澄
告子やまのをて口論（ハとき）や以　青
あ縫かしき井を思へて　春
枕の注を顔了さびしき　澄
針立は宗庵侍者見まくれて　青
秋たてて目覚ハ阿山は月　春
河ら柳枝きのふハ峰の霧知楽　澄
四五文住しか露しぐれん　青
二ノ夕日のけ光ハちよくにのこふむさく　春
塩くみ浅ふ沖津ささ波　澄
竹戸柄の波の門やゆめふん　青

渦きりしし本ほし螺の泉　春
山ひと川こぶの松おろしきの雪　青
年せくかく寸岸の青柳　澄

同

捨舟してもつきよつてん哉　桃青
出くその浮る波のあちら野　春澄
川流の杭木や試のつくふつむ　似春
手乗手ある蓑みとらし　青
又とりてのあらうそをし岩根の月　澄
言うり吹かれ山お秋風　春
ウ子ろすこみの足しやすくやらさ労それて　青

ゆふまし　雲乃あさくし
播磨や桜の宿かけさ悔むらん
嵐阿ゆくる謝の文浪
於小舟米俵の浴さひ京
花も籬も名草生ら
なつられハ抱こし女ハ負韓郭
大海さしいはきくて露
一夜の月八分の加ららをふりさて
ばくちにあうし小男兼の角
鼓芝居ぬれてや袖の雨のむ
左やすると右としして東
二
麦飯の菁や夏に露むれ

渓　素　青　渓　素　青　渓　素　青　素

妙なるのりとどくとくのつく
幽冥ハ残滴舟にすこしのひむ
さの仏にすゝひとつ浮子の浪
投入ての金龍山や尺二つむ
聖天さくはもるそらせん
帳面の尭次を浦にあけさて
あたりて手ハ石川五右衛門
まくらあひをすゐさのたぬれハあん
既に不帯も耳や子の枕に
料の月様町さしさ簾まき
ほ家をおくれ寸庭石ぞつ
三
吉男の◯子あれる秋文字

渓　素　青　渓　素　青　渓　素　青

鶉の床に走らかし鳴　似
庵ゆすり佗みくれし月とや思ふらん　春
きぬぎぬの手ふれ天のつく山　青
佐保姫のよめりげふもさゝく　春
古巣に見える仲人の鳥　似

同

宮や月下は金の通り町　桃青
夜に鼓ならぬ看板の音　二葉子
新蕎麦やこゝらかられみ田舎村　紀子
蘆の葉にゆすりしれ味なる浪　卜尺
盡ぬ柄わしの小舟に見えて　二葉子
下男に与市その射　桃青
素手の矢を先悦流にうれる　卜尺
茶草喩にすりこしらへ　紀子
寓諭の縁の紋を紫ぞ　桃青
姑をたのみの手緑青の山　二葉子
限りの峰より月の前ふる　紀子
秋をせめ布北床の山風　卜尺
横雲の鶉鳴すそまくれ　二葉子
精をはげむれは三位入花　桃青
かゝと寝てねの浮身ともなりて　卜尺
又屋をきて嗟ふてふてく　紀子
常は布子金身をあざむかん　桃青

二 詠田のかくれ待夜こゝしさ　二葉子
毛氈を浄門の閉られ錦あと　紀子
そよや霞紫嶺深葉する　卜尺
破れ袈裟御紫のかなひ後ちよ　二葉子
前より羽ゟ鄭公とふ　桃青
押入や淀のつくし北窓晴子　卜尺
織もの売し物を室の森　紀子
熊手丈まれ外面の松見えて　桃青
屋様にゆくゆく峠し猟　二葉子
焉郷を京根のやとの主や山　紀子
俎板の月摺弥の不二　卜尺
昔の秋三千余人の掛物　二葉子

二ノ 縄かもこのりと欠落の掛　桃青
板蒲子精合のつまをとつゝい携　卜尺
太坂之川も尾のこゝ後る　紀子
弥吟の火入とうやい是とうや　桃青
鬼一口子伽羅を喰ひ割　二葉子
花の時子方といへ川し花所こ　紀子
悉皆それそれの王代の事　卜尺

同七巳未年

あられ茶子つまん年の暮　桃青
笊籬味噌こし岸傳ふ雪　千春
漬風の某發子隣子渉て　信徳

縁に紙衣ねもくつけて　素
嵐とうら花も力の入るや　素
ウ
跡蛸けしきハ静なりし　仙
河に住しや一の女ゝ枕の初尾花　素
百み經うをくたそふれの秋　素
化し妻をとかうゝの釋迦の涅槃ハ　仙
睨みいハてけら十六羅漢　素
又男ら深かうらハかくうねて　素
古の袖わすもむそしるて　仙
つらしと記念のやを六雨さん主　素
雅ひてとやぬさんきうの露　素
須加月まれさ此らう言の月　仙

色絣了菜る厚の細さ　素
料理人泌みを立て菊の浪　素
木兎の扇汁の素風　仙
二
住吉の汐干了尺しめ小刀紙　素
御の嫁松種ものをとく　素
走てに旅猿と袖と挨うつゝ　仙
枕家くし縫ぬけの果　素
論をつき天の深さし中苑て　素
経の御おこ手跡をとうしるふ　仙
滑川ひの了丈手火を底　素
鶴の家より羽箒の風　素
いそしきえら利久とい而しは浄える　仙

紗はゑの三郎よし秀の月　東
虫のおりつゝ百夜お書し　素
はきこ長して石摺の寄　浪
二とんよれとて此所をいふは寄　東
園生の末葉あり十四行　素
別きやさし乞食の妹背ちる螻　浪
うらはす停てこまのきめし　東
思ひ川垢離して七夕の夕霞　素
角豊や維摩の説つきるの書　浪

同手春
菅想

きゝより二内中旬御霧子　桃青
天下の梅のけ香水よせし妻　松風
面影古気ひろくあさまゆそ　似風
志ろう木嵐子やせて負ゆく　氣
宿下りまれ鳥かほのしと　惠代
谷の戸口子つゝれ香枝　秋風
上ゝ吉の歌の音吹何らし　布巳
其里の雨も金箔の秋　執筆

同
いろつくや豆腐子岩く落葉　桃青
山を志らくし櫪の下香　秋風

それ桐壺の度袖有かくて　風
こぬての(?)こゝろ風のうら枯　青
阿弥(?)え餅子なの出る霊の出　丶
精(?)すさたれて峰の松本　風
知(?)れての月岩根の床みをし鳳　丶
あら山路をゆくの行末のしら浪　青
ウ 菜(?)中さしむ袖より傍ふ風さそて　風
何とも杵等すゑの河竹の　青
五十点あまり中も汲(?)てもしる　風
ひとむしろかさ絶織(?)手に骨　青
随筋(?)手ゑんでとしろ流の象　風
青麹(?)河しるし枯も姥男(?)　青

小松山(?)思ふくものひとつほとり　風
ともみの河のうきめしの末　青
風見小坂(?)釜子浪こして　風
辰吹ける紅葉(?)みつゆ　青
包金み秋や枝子鹿ゆゑん　風
ろく書青む山のたえ月　青
烏(?)の峯もぬ子帯(?)花の浪　風
二 霰もはしに名るかきあし　丶
ろうき枝ゆ嫁(?)手まれ志てみ深　青
嵐の日にえ方なくなり　風
米俵ふるえさやすまてつてむ　青
四方のゑみふ出持(?)れ中さ　風

道ゆく錫をすゞしくも鳴らしゆき　青
菊坂のつまりよれ見えしの　風
親父殿さらし清船ハ川にうる　青
まだ残ハ多くあけ彼岸ぞ寺　風
秋風や赤い豊新婦みやう　青
子を虎さびし　森の下家　風
此月も葉緑の日もものさびし　青
酒ハさらぬ程にねつり物ども　風
番槌ハ鳥さへも跡へまく上下　青
四里の隔ゆる舞の岩角　ゝ
二ノ 大庭をハあてハ人来れてある路　風
松のふえる手下帯も外し　青
まさ柳の張な波の子安貝　風
瀬は増水の桟舟の庭　青
破小舟削ちりけるを見とれ　風
本城手うる音砂地の露　青
秀色和らに藥をさし庭の月　風
かきしるさ雲か木盃山の秋　青
味噌すゝしさめしき旅の谷傳ひ　風
三ませいのよしや隣り若　青
つらし鉢や大壺の門や火吹竹　風
みちさ秋高のとりしのり雲　ゝ
花くもうえヶ江よりおとされて　青
春の里橋卯月れの春　風

三 蕣かや絡もつ鵜千流るゝむ　青
羽箒とれハ風そよるし　風
重ちよむ等しうさて竹の皮　青
夕ねこほ揃て柚煮しまる　風
小使利のみかも何やらむやかまふ　青
いろこへぬ杉と偉ともし火　風
でる所さてかりの足半生の眥　青
難杉の桶结かうそとしさハ　風
上方のかうつ紀えれぬ使さて　青
ちるゆましゆめ千かさまさし樒　風
孫行や二度うへるゝのあまれ　青
若もえ川ちや千東市さあへあん　風

光穂のよるの小袖を引かる　青
三 一汗ふくのは谷川の月　、
手拭の雫千浪やよむまふん　風
ら松羅障子さいての浪　青
とろけ生死の海をたゞよふ　風
あさ小半しみハ笠雨月まて　青
開闢の天地既に火祢祢　風
岩戸千かくしあふ杉蛙　青
つくのうん鬼の月のけの袖枕　風
神かひの坊りそし八絵道　青
菜刀の先ヤうしみハ蛍けまり　風
山妻まやお植のつゆ　青

やゝ涼はなれし袖の月　風
踊りハ堂の果計厭　青
花に気の晴し萱をくる物くさ　風
篝籠一籠手拭まし寄り　い
名
古郷人ハ裁付見てや偲ぶらん　青
岸の桜を思ふ椛子業　風
簡の暮頭し風吹くれぬる　青
義経見よゝ花のはらつき　風
玉子返しみそ汁を手向し　青
冷も昔しぬ大佛のあと　風
兎角精舎住吉の意経て　青
白糸まもしむ朝寒の井戸埋む　風

朽屋さへ有てや竹に隙もなく　青
乙女の手のして白鶏子の筆　風
呉服物後家源氏の花の通ひ　青
石山寺ハ秋なうらつしき　風
名の字の心法おて瑞梢花笛　青
是彼岸の浪方の夜み　風
六度まで渡りの道る橋こえて　青
よしよしみ法類　手万　風
篝あれや法類　篝あれや　い
さらし菊しし狩の丸れ　青
朝たのけ京々しふきをきゐてく　い
一所にいそう　お続きくし　風

おもくさ薪すつもハ花ハし　青
こやらのくろう山里の春　風

次韻

表題　天和元辛酉

背伯倫傳酒徳頌楽天継酒功讃青追續信徳七百五十韻

二百五十句

かのさいたも友てハ志てん花よれと

三　文のさわくのきもゆくく

鷺の足雉脛長く継添て　桃青

這句以テ荘子ヲ可見ッ矣　其角

禅骨の力たをして米寿に　才麿

志ぐれしく風み松ろ杪のしき　揚水

鶯ふ歩くいづきを鐘ろ住く氏　角

蛸心うちもし縁しきん有　青

激雨ゆく扉のこ山の木で上ゟ　水

栗ふ稗さく黍ところの宗　麿

僕すめ画屑を宗ふ呼さるん　青

菜虫宿らつ花しそりて　角

本のし比乞食ふ杯の六をるす　麿

先祖を尺　ろ宗の花うしろ　水

妙をえしく幽冥をと迷ふ　へちも　角

ちまいのうくすかうつ引うけ　青
武士み奴まつりをゆれける　水
女ハふくすそやおとしいむ　麿
さ月ゆく隠のゆつきさる恨　青
ころみ猫の月を背けり　角
窓に霜見ッ易別息し恋　青
乳手しの穀の偏る葛の膝　水
ま秋を花し食よれいまま　角
白魚をかきよせ餅舂の家　青
寒雪み勃ほん似仏会を　水
漆士提灯を枕しさ成る　麿
くしたまゝる女房の出る　青

血柳の霜も程や思ふらん　角
これ来しむくろハ起きてよしと　麿
田楽の山をまのくるハしむ　水
天帝に日の海をまさすわけ　角
桂を壊ッて星繕をとうめ　青
市の揚子風のかすまの山さの子　水
秋に翁しさ利帯業の記　麿
白き劍仁紅葉村に送れし塚　青
滝の火就鉤をし舟て　角
師魚ハ諌め饅ハ鰯を割きり　麿
安房の岬に法人弟を治　水
向ほうし行法ちゃ喚隣を　角

柏杞に初音は魂鳥の魄　青
恋人は被に似たりかり兄ぶ　水
面とらるゝ月の雲風の妻　麿
夕暮を息に惨りと吐すなひ　青
民屋はけりき膳をせくもる　角
咲ひの木悲しき芋は肥へ睦く　水
まるさ窓わくゞる淡々の古笠　麿
有兄きらひき膳の何娘しくて　青
あそれとくえし杵とる粳まのる　水
絶食し小納よろしきのぐるぬ　角
鈞たまくらにもとぬれしろく　麿
路に想たる神宮は本持なり　青

都に菓作る純の舞　角

同

ひやなと以五文字をしまふ　其角
事追に笑て絵扇をしぐるま
ことしは稲穂をと霜覚て　才麿
月をとまりやそろ鳥帽子を加茂も　楊水
海より陶をおもふけしや　桃青
おほさまり川をひいて此集を志こさむ　麿
以やし山海に鶴としきたる　角
夕立の一筆を吹すからぬ本て　青
荻塩松風の事をおほ関に　水

ウ
市の闇にすけて敵を討もらす　角
前菓子紫の庭枝打戸　麿
とひかへし仁王手より声を離れて　水
たきんとて衣をかしく　青
寝覚さむき伏見の鐘子招涼泊もる　麿
ほりし八川は帳の秋の室　角
女の影ゆうもと見しは繁く　青
若衆年のしくやつ童に個て　水
ストヒト茶入落してハいのちも　角
取ゆくすら牲実つゝまつて自　麿
秋の末つうき味噌汁とゝとう待うて　水
蕎の院外法読をとゝふ　青

鬼箱を人ハ花を昼るめり　麿
子国の霰も寛子ゆかけて　角
二
渾沌聊子京て筆ゝ遊ぶ　青
初咲しゝむ万歳しの山　水
雲みる女房に鉄の足ゆるり　角
よし原果をもめまみいさゝふ　麿
棒軍剪中川時きとすつて　水
ゆくゝ向ゐずけより称干絃ひく　青
家の霊をも風明王のかうまも　麿
唐詞来つ若柰国手生きる　角
ねうとぬるを耗醐廣庭遊ゆ醐羅峰　青
ゆうしと首て風とや吹　水

松の会とおしく翁覚ゆるは　涌
垣間のさゝく耳て鏡立　麿
月の秋しみえこへ外且夕さ　水
夢に志のつむ妹か薄娶　青
二　まのいちく絞りて良か強く文よ　角
絵と随まり外無常て治　麿
小納戸本枕て帯さしる紀て　青
納戸の御をあし来る　水
棋掃く襌二用於鯨く脯　角
庭ひの翁蘆原うらうて入　麿
風いくまきく那かありるに　水
甚あしすつれ枯保まれく　青

𢅘しとと白骨の孩粧付てれさう　麿
蓑花利新給をよむ尋秋長し　角
猿小傍豆殻て有の詩を剃せ　青
霜をゆくも色荑てしるに風　水
花のちり紛れて草を豆まうし　角
様まつ鞋をつるまするま　麿
三　不審でひ且りハさ青の雲を掃　水
箕をし束て言く莚とうれん　青
本のつし外かくしの枝で葉千十九　麿
山前踏を抱とらを々う　角
見ひかす人ハ此處くし所さし　青
木様の由丸し宮木瓜の唇　水

羽扇に鬼灯の燈籠照しけり　角
踊形衣北旅に浪　麿
海の月佛伽坊主の夕栄て　水
古葉なつかしや桑の泉水　青
河骨花葉はほれ果もなやつけ　麿
ほむらすゑたる地火を化　角
菜地河る根の底にをさまりぬ　青
天火〻閣の金ほりの営　水
三
坎江の残木岸に八寺し浪に　角
青海苔らいは蛤野を渡　麿
花の蓮盃せて旅酒を覚たり　水
有手秋とふ東金の僧　青
さひしさ残夢夏山寺に千す豆俵　麿
夕ぐれほむらく貧窮ひしける　角
桃の木に蝶侍しこのおもて箱え　青
枕の清らかなる夢寂しくも　水
篝の首をほむと枕亀にさ虎の豊　角
柔ら宮の仮生はなきこと方々は　麿
紫つらを跳ね折くのれてハ念佛屋　水
泥竹清き雨の火青し　青
宇の花く茶あら東に呑くのより　麿
秋の黒さ足ほつきは濁　角
名
配るハ人芦の小昆布をはさみて　青
何かへ地蘭幸蝶を枕と　水

花やむ鯛ゟ討さます生小舟　角
すゝき尾ゐ持をもし山武　麿
麦畑は豊の更りを覚へり　水
勅使芽原の御所芽角　青
秋を啼静の音を追へさし　麿
さやきの人れ傾しくきほさす　角
津の国は生田の森の秋月夜　読不知
そさまゝけさ乞食掛ず　水
雲下くちて里は衛所り　角
寺しの納豆の前ヶ何し続　麿
まきの紀し檜花ゝ雪の光を經　水
炭焼ゐさし小袖お隔さし　青

膳をて從ふ桃の清水ゟ氣ともハ　角
蔵みすく殘り生追しき漆　麿
竹の戸を人まれに女の霜ふまれて　水
歩そ孫のうしみてしくよ　青
流のみすみんしと鳴きれハ　麿
手とさをとくゝさるあれ深木　角
姿作りて寸龍ゐの浮すと　青
ぬ泉法修の素力修り　水

同

露ありて家主ハ秋の踊り哉　才麿
修きくれ月ゟ株萩を貰　楊水

ほころびも蔦子八百菊子来船さく　桃青
餅さしすゝり生海鼠嘲く　其角
雪の宮みぞれの宮しぐれ〳〵ハ　水
藤孫の尊手題を役る　麿
系やつとかくれて風條林と呼　角
将チ羽おしみ気をてはふきし　青
ウ
蝶しきや女防のせばく浣衣を　麿
急ほゆれしく身子待テ　水
まう定て樵の戸叛をこゝら放す　青
枯ゆく扇子悲子うらむ　角
数能の待きむ辺ハ蘆しく　水
牟抄婆の男佛のこし衒きる　麿

骨刀かくろけ猿のまろきし　角
痩さらす一ゝの孔子顔うつ　青
肉寺殉てもらひたハきものふ霧堀　麿
米とらく肩は耳りり咎けき　水
きくもかびく笑子おさく秋しもそ　青
曲豫居士して叙子てのまや月　角
草耕す意徳の少年花つけて　水
茎菜に乳子のれ汲りむ　麿
二
后宮の藪入まやうし躁る　角
秋うしや上お衛て丸寂のさや　青
障中の一つ提て秋の雲諸の恩ふる　麿
提灯きつてく霰のうけるひ　水

風あの角内と為を悟りつゝ　青
入れの山ふみ狼ありのり　角
雷の斧丁ことしてき更了　水
言く又言し　龍陀の玉　庵
俗のいふ麻鳥の繪れ衣ふるや　青
郭のうみれ东布蝶　角
何を覚て諸の宿てや足ある　水
ひそのしと雨籠をもは　庵
有ると舊く草の葉れ行軒端　青
栗ありぬて蕊子干ける　水
二
露銀の朋のいの敵なしと　角
を汲起て帰し去めく　庵

釜ふぶる人は志のひてふおりふり　角
植をみくだくれの末　青
古家の須あり闇すきへあ絵ハ　庵
いくちの侍くて風のねしふ侘　水
麻の葉すて生る小餅をわまくて　青
あふ枝さすふり生の浦柚子　角
きるゝれくて清く味とすむ有子　水
ゆるく霜蒹をかけ液ま露　庵
居寄の食く須しにタ暮る　角
人返を待て出かえれふし　青
石ヵ日花のめてゝく咲ありふり　庵
木ありみあて風を霞　柳　水

三飛雨甚ノ紙ハ露ニ出シキリ　素
題アル遊ハサル紙キラクシ　角
大根の葉越の関のこゑさより　水
雪のかゝる鮭ハ文代てやら　鷹
おとろくや火桶の姫の縁寝まえ　角
うろひし床ハ蒲団引つゝ　素
立やしと霜入るよくにさし　鷹
西よ首の住さたてすむ　水
やまひしれ根ゝ葉みめつけ塚　素
持番おし今時りし薄く　角
こまひ有る村風より三味線を　水
優しやすき流こゝまするの　鷹

秋の露後ゆ萩もてる秋ハ　角
住持ゆるしてゆる紫ね戸　素
三楚しろく雪ハそ招ひしテ　鷹
法きちうしろ燭台の青玄　水
忘時の松ゝ娘ハ花の墓　素
書る去ヤ読る雲の御神　角
トつし染ハ着れ志らしく　水
地の峯立て笠ハ招ひ　鷹
無住の空居ヤ仮の強性強ル　角
清ゑの図表　さく　糀　素
川も気法味方の難きてらに　鷹
志尼嘶ハ叙りうり　水

云ゆる棕子檜ひすつのりしさ　素
か男か廉み縁引て入　角
松茸やさしやうへは枯ひろう　水
栗の梢そ月のいづ　麿
名 絶霞子菴の声をし思ふなる　素
兄袋さげ窓に風露をかり　角
扇折女は夜に指し見さて　素
文は江戸に志てきれ咲　麿
むさし一おさすめのと積てやみて　水
野ゆる草のみ家もし咲て　素
桜に来て上る谷の赤うん腕く　角
法眼が書し武者絵しやらん　水

雲遠る君の庭の花のうしろて　角
熨斗を肴の欄干指つけ　素
はらしなる聚楽の池めは松踏り　麿
有国に人は茶將し　水
風の月熟の湯雲を踏ぬるへ　素
十 年なる小宿針阿やさよの露　角
山路てくいろの金を直えれ　水
篠の枝折を積れてさる　麿
呉竹の梅をも深く立めてむ　素
年もとうえて拾し人の目付なり　角
血をも継ぎ風太刀を折とる小膝て　水
古跡を取て野にさき枕す　麿

ゆきまくら花見の夜をもしろ　角
猿ハ酔テ醂醅を入ル　素

同　餘興

附贅ひとつ夏に置ける口の春　揚水
名月の枝をうつしたる茶　桃青
花ハ蟲付てうき世の詞をひいて　其角
冬の狸の世出ゐるを隠して　才丸

天和二壬戌春

錦ちる都をたまふ百つくし　楽樹
竹の花花ふくる二月山かな　千春

風みえし三絃の花をやくらけて　卜尺
雨攻ちる雷をわすれて　暁雲
香月ちり盞の陣を退ける　其角
せんしよころの宿子友をほ　芭蕉
きのふのく室や湯やの花を番す　素堂
梓桐の夕嵐をと枕にて　似春
孤村たくしつる芭風丈を恨むおと　非雲
蝶酒樽に吹うとする　言水
おもしろき八山崎小路寺　執筆
新たれ塚を四向して　樹
綿輔を見ぬ筆代をされ　千
小海む爪白毎をふくさむ　尺

悴る後宮の美をも見やうに
粉黛の顔一日にうつしたる
竹御坊宰相の宮の君枕
八重の内に笑みて輝く
味噌粉もこの家の戸口に
治まるかのうく萩の小女
薫に花訓詞の尺入らは
二粉枝にて地をきることろまで
頭巾の形をさしてかふしと
鉢巻にて乗る佛界に飛
拳の代は唐の町と我ひし
殊に物言く五出にて一樓

暁 雲 並 角 宮 晒 似 手 珊 暁 角 並

屋根は漆く端端の赤瓜に蹲るし
攸の赤き蟹に血をうくむるれ
桜の麝蘭の編まり松立て
槐のつくりましたつ大しくや
白萩の李に酒を買ふとこる
後吟書に雨をひとめく
風呂はにて矢つまるる流く
猩の様に餅茹ひける
寺の五悪後中に帯てまの有秋
猫はさしらえ種のさしは
二ゆきうほてぬ前まるいて龍
藍霞の嫂　宗をとあらそふる

雲 宮 尺 似 並 咷 手 珊 暁 雲 宮 並

此まゝ錦波の小みハ流るゝ秋や　似
紀の舟伊勢ハ舟尾張船　榭
波ハ白浪さしひるみも文机かし　壷
契情ニ膝みせて天つるゝん　暁
こゝ宵手あき筆を書すらん　角
梅の枝ニ少案たてまつらる　吻
庵錦稜撥りかられて灰ある　尺
いとしぬ殺生人戴夏加ハ枕　子
井さこて晩ゟ秋を結まれ　苴
むかしみのおかみ檸囲まそなん更へ　壷
笑み觸を花ニ打しきて　空
背菜のみ薦しし襟の爲　角

三
古津ウシの月の三十日の宵をすまし　暁
雲もゐてえひ年日を杖つく　尺
山吹み声ニ雨ぬけるや君ぬらん　子
花の花衣けりし　伴　似
寄手入王荘の流雲の　洞　吻
りゝそ訴へつ不二の株上　苴
松姿の祖父尊くさせて　榭
味ゟ霊の蜜柑熟スル　嵐棠
成下ニ火ゆその饌生きこそ　岐水
旅小刀比帆ぬけて行　暁
去歳古や世稲の松ニ落を折て　角
かゝすの岩堤てゝし　壷

橋上れ香をハ淺きしらしみしらる　景
西瓜ハしらぬ滿るむ　子
三ツくらき出くれ角豆の粉　暁
月ハ蕉坡の古おゝやしほ　樹
道者のよそ所要ろを秋なつ尺さ　嵐
つき一番手つ手お誘ふるよし〱　峡
歩ミ子おと一すそまつらん梅花　角
百姓の家に入て後切　景
是此等先祖の楷の火の消ぬ　明
時にきしに未ず生る蘭　子
雨をとめく散いの様み閑る　堂
葱尾ふ猪の葉ず落ある　暁

衣裳年まへむる翠り知ず　樹
をふくき葉や花の端つてき　角
陀涅槃庵後の淺き志ほし　峡
萱りふるふの手引の藥　明
張權叫ずしずかろきらく　樹
覚えに情人　秋の蜩　景
月ハ回り山寺とのを敲く戕　角
石風花の終ハ急ゆりふる　堂
常木の殘きハ微ず秀きし程　子
そそとのげ金色の玉　峡
袖す入蟷螂を取りきん　嵐
流の玉はりけるずかゝのみす　樹

我ものに誰なき腕のかゆきこと　昨
闇照君境町手溜まし　角
肩に結て短冊さくれを踝く　暁
奥まくの清の陽に掃く庭　道
篝火をとり入けれ去るに山　葉
浪八丹続きかくし岸人　千
物洗ふ盥をふるく葉に　峡
鳶つく何なれこほし釣　暁
市鉢のあひしをみて木陰ハ　葉
夕傘さすみとも嬉と男と　昨
言寄りて邪魔をまつけるかな　堂
枕ともせす燈　桃灯

花のあくと遊人物すりるしき　道
八重し香花り小ぐ物　角
て和手中
野分さそて伊賀の山越来の空　秋風
身ハしもしらかすむ武蔵野　芭蕉
店賃の高い評判書の末まで
とりやかくやて芽く手あまる　風
岩間船されて石跡の月寒し　、
ウ 続く来り続く八八の七の
錦ふしき僧の療千貫て
きのふれ酒を借りてきけ

隠やかきくて紛ふゝ和帳
歎仁以来の山野名しるしの風
古以の松八ひろゝ境杦
朱衣を見えて村雨過ゆく
豫逃ゝ道はやゝ十跡る月
家もし　渡る神戸の寺
御火大嘗さし清は秋の風
すこゝゐを宿すは手枕の露
一生まれ都る寺の茶の香思ひ
二 声をとらむものゝ手一つとして寛
強めむず　秋の展乞ふ覚しや
ふのゝを余し　寺きのゝふ分

お数寄を包む袖のきれ
流をまねぶ踊笠のひも
崩しうて心の中に寺ある
まさに洗ふ岸のしら露
又ひとつ加て進む法師衆
いさこそと跳ね飛ぶ尾有て丁むち
肩に掛けて旅法事有る旅衣
三里もくつ此らし　約　秀方
追剥すきをも何ふかむ秋霜の露
しけゝ流れさ右力風の米
三 吉家の秋十の紀る宿暁て
雨や墨葉を涂て御くわん

消残る手柳の幕帯の多くのけ
火跳の陸一の一二寸ほと
行もあら詠め拵ける花の許
江戸千丈上野風まての葛

芭蕉

麋州
一晶

同

亥年の生行秀を號える心の外
養子ぬまし微潤む微
薮の葉千酒濯行み宿織る
法あゆ路艶ちよう乃笑ら
西後小微の號なりらてまた
さらしハ二十八針きれ

ウ
きさしちや武見物絲せ上
後家湯呉亭の翠箔の飛かくれ
かくしくも旅みハかし矢嶋の里
文ろとろのつ門たくくおと
むつ雪待そと賈了来る人あるん
一嫁の郷千江の焼死舟
ふ慕さ愉しと為舵千乃
蒼風張ムル倫乃閏
グッロ子り精守もいさむ消迦
昧荻朱地とうみを萬葉
花行そを橋ハ郷とえつそ以て
蕉尾ハ風れ根をとらくまし

二
陽炎の昇る座佛の夕の大工
蟷に蜂哭百年よ蘂
今朝よりもこれを花の袖を打
糀のり坂は清く澄る也
血手洗ひ甲を取てのけ是ゟ
餅をあまする大年よ俗
花笑おもき食ハ家の業竹
手ぬぐをふとる牛蒡の葉の蔓
簾さす頃ハ又夕き蝸をすり
古佛の般子復庵をし月
身をしられ蔦山伏の袖ぬれて
併白雲の居ここうきし

三
ちきり雪牡丹ハ昼よかへ火ノ手
白露袖躍ルや兎戯
赤ほ兎る乙舞そうる雨降る
夕顔若旦すゝりん
丸っ北鼎ノ粉そ花を悋
唐を出ゆく夜の文稿

同　　麋樹

故竹垣積ゟ木瓜も常斎ゟ
笠あむしらやみの雲むかし雨　一晶
恭ほうし常ゟ梅を掛らん　芭蕉
帝ゟ小雲を蒔ふ新月　樹

良宵の座ハ小袖をかけて
紅白の菊風に甚を採
静なる卵塔のもとをとらく
金人ハ椽をもりて此銭か
粉さし此夏父ハ佛前よまうて
上拿の鉢といはふ三線
しろ玉の裸を舘に飾らり
窓丈聊よいのちつれなし
静のほのからぬ鈴起されて
こゝしと蝶さく蔦の小川ちり
母の歎にはからく肉をかげをり
しも能くならぬ筆をさへ顔かへ

晶並掛晶並掛晶並掛晶並掛

通邦来の路葉花を吹くしら
指決清き詞精にふれ
春風の地に韻をかりむす
かうすハ縁を告るふくら
院の内に降米別ん君を迷て
青嵐深く冬の月識する
風の絹糟りの声をや掠めうん
肉野をたより花行の麁
新しき塚ゆきししと呼すこし
鹿を後に臣にいさ名んう
千金をいやしく叢去を賣よす
飛姫も指れハ納くくしや

晶並掛晶並掛晶並掛晶並掛

十分の三十年を老の九十九髪　晶
筆のすさみに念仏をかく　蕉
二オ
蓬生に火を消狐来りけり　樹
鵲散るを遣しけり秋　晶
烏ちれ鮮布に風を買をつく　蕉
杉の葉をともる墉墻の千代　樹
烟詫の室花の浮牡人　晶
子跡に散ゆくる春風　蕉

天和三癸亥年

花にうき世我酒白く食黒し　芭蕉
躬ゆくを尽す陶潜の痩　一晶

郭公にて青梅さて味ふらん　嵐雪
童子縁を手折れ店の梅　其角
月を闇す汀の薬を芦すりて　嵐蘭
浪のまに伏る亀ぞ通ひ新　執筆
ウ
踏鳧従ふ雨よし釣れ竹雨よし　晶
朝すさびほしをふる千鳥衣　蕉
浪人の恋するを法ゆ思ひ　雪
やふの一枝手入れ一のひとまえ　景
蓑猿閉し宗者を襲ひくる　角
春ハ退ちり解硯を奪フ　晶
雷冬の秘すきて箭を明すらん　蕉
汐照海干し松魚原漆　雪

芸情の陰を振し幾代より　晶
雨織に角をつくる風流旗　角
阿らし吹の桜をむさ字の月　葉
破笠提けて詩の上をと次　雲
二 新解に爪を踏るなるかし　蕉
つくしきてめけの松海に携　晶
足つゝる楊柳くしの豊庭　雲
是ハ私のさつき紙のむ　葉
根入ぬ顔ハ六十の荊はなう　角
汁所に放むうくきて夷し　蕉
人の情愛情長の宵の闕子筵く　晶
松たくらひふお雲の拗けをみ　雲

きこゆしや傳中に似をいとふうく　角
山野に飢る餅をも貪る　葉
姿弁の有は紛夷る足後よ　蕉
木戦ハ武士の情抄　角
二 尺くもしき鶉素を焼や柴枝　葉
気らひさんや工詢るなとしは　晶
曉の霜をとも毎に覚されて　雲
猿に嵐ふしすりもる　蕉
花す栖霞山の列を名残のん　角
梅すまれに瀑布を酒飲　葉

同

酒債尋常住處在
人生七十古来稀　其角

詩あきんど年を貪る酒債哉　其角
冬-湖日暮て駕ル馬ニ鯉　芭蕉
干鈍き夷ニ関をゆるしけむ　丶
三線人の鬼を泣しむ　角
月ハ袖こそろき(?)膝の上ニ　丶
時の雨(?)走てくる(?)萩(?)深(?)し　蕉
恥しらぬ僧を笑ふか草(?)芭(?)　丶
時雨(?)山きぬかしこさを葬(?)　角
笹竹のとてくるを葛(?)浅ふかく　蕉
[illegible]のやし千(?)[illegible]を悲　角

一の姫里の衣[illegible]椿　蕉
斬名ともいはて題を責らん　角
[illegible]怒の雲に峰(?)ちて　蕉
[illegible]乞食の夜　角
[illegible]花[illegible]笠ハきん(?)法(?)　蕉
芭蕉[illegible]の蝶[illegible]　角
腐れたる俳諧犬も喰ずや　蕉
[illegible]富(?)ぬ[illegible]月　角
葬入の[illegible]　丶
[illegible]　蕉
嘲リニ黄金ハ鋳ル小紫　角
[illegible]　蕉

枯藻髪栄螺の角をまきわん　角
魔神を使トス荒海の空　嵐
鐵の弓取たけき世に出よ　角
虎懐ニ妊ム夢のつき　嵐
寂々四睡の床を吹あらし　角
狸火消て精のともし火　嵐
下司后の紐を奴ゞ月を牙　角
西瓜を綾ミつゝむ詩やふく　丶
二ア
袁の字株咻のぼうし吹消さん　嵐
みちのくの東しらぬ石的　角
武士の猪の丸角挑ミうす　嵐
八声の駒ハ秋をしらで　角

詩あきんど花を貪ル酒債哉　嵐
春ー湖日暮テ駕レ興ニ吟　角

同

一年三百六十日
春日吹笛之二三日　李下
詫やく妻やしゝ白氏書きし
寄る浪ゝ芍根ゝく舟　其角
月やと芽の隔や枯つらん　丶
こゝろさきた業をよみ峠の声　下
百をとゝる船と秋をなくさん　丶
傾婦を葉の蜂ニしらる　角

ウ

敵ハる流のさゝを打竹　六

然ハてこい一番の薪　角

文商れ金持ハ貴をもつて呪　六

みとくとう脇をつち善ふ　角

世沢をさの八沢といふかい涙き　六

士峰の愛を守むか登る　角

松方こ西年子域の読こう　六

名をくらかさし黒木串枠　角

艶慕の花见る男内ゆのし　六

妻こ名月とそうはひの家に　角

月にゆ帰る生憎のすれ上戸や　六

花をさらくのかすさ菊隠　角

二

秋の月れて堂前に絲をと村まん　角

院の法家の遊ぶる家な扇　六

春をみ鳥京小野をと出にむる　角

仕組をくくはす八平のいとらに文　六

墨海子女房中くを新むは　角

霜みられかもし地とよう若　六

蒲よる顔骨何をと貸情　角

風そよ夕切窮楼の紀　六

疲なしふ冷菜ハ秋のむくのしまそ　角

こぬ秋の枯子野を嫌む　六

名月の前ハ流てしくもうつ　角

金楼往子粕のみを初ます　六

二

葉生岩あをゝ無躰成奴にたとへきん　一下

すり鉄にふる学書みれ和　角

寸法御切の心ねみしかゝれ　芭蕉

背をも力む幸於婆大小　下

併の多門をみとよ花の露　角

凡丈三百人の妻の好　丶

寛文十戊年

果しもさされ之肌をぬへと衣　助勝

夏去りす涼しゆうり風民　正教

かけ作り河原拙者しに足渡りて　宗房

同

抜は家の玉葉古刀の一葉切　長忠

さふ川夫の振りつよし秋風　定能

冷しき石はさうてう虎に似て　宗房

同七未年　一句附

肩に気抽て当年のつはら鍛和

それをたえ付と河む身の家　宗房

後生願のひとみをおしひのさ

志やつの鎗捌きせまりのつき刀　訪

蜷ハ歯さへくみさきつらしれ
抄さきれみへそうる浪をかそん　防
延宝六戊午
大坂屋の蛤りもとめに不二の嶽
塩干さられ舟内子の浦女子　桃青
虫の声白髪とけそハおもはれ
瓜の井ごの宿養ふ花　ゝ
孔子ハ鯉魚のさしみ好ミ取れ
彩雲する蓬来の頃ハ有更て　ゝ

従来笠斥くつろゝ嗚呼し
蘇ましきさうち刈萱やし　ゝ
将る名ま兇の餌食の生肴
南無や浦猪鰭酒末近　ゝ
張橋に大道塾の若をと交る
仁義菩薩に裾をとおそる　ゝ
指桐のおりこふつかぬ出見して
大宮の法え和菓子と抄候　ゝ

旅のうきは寒さや入ぬらん
大津高良脇と高島の御射
戦船うちぬる引つらひてよれしと
敵手うらしろを見るる尾つき
桶ひとつ物の記をとよめる
うき人写きぬのみその出
夏の雲うる家の秋なりけり
唐網打ハ浦ノの海浪

まよろとて見れハ驚まれ紫水
沖之らえ中雲をむらんとき
しなる者既に雨家とかの時ハ
御本しとききとする鐘念の山
御川しき青葉流れの末
世界をめくらうえるる大将軍
甘く時らえしよきの海浪
綿積うえん手尊し多田の子なり玉来家

上ハ脇さし中ハ竹箆
見せし比翼子挿としの鐘見え
中キかゐる長枕の歌さ
送り給花折しきて廻らせ
島の錦を今も海に沈めり龍
女院語しの礼二位の尼鎧
大政の退屈とち引紫する
津浮悦の古つくりし稲葉山

宇治川ハうきくの蓑御堂の寺
みの笠小槌けし玉のやい
手鑑千五百の句と流布し
黄蘗の十うつり剃刀をとく
蹄千よそ何ことらひすは書寺
見も又らむそく佳饗夷ハ入姓
高覚ミとひしきし浮庵の庵
若枕かしも本殿ひとへかよふて

夕ぐれハ松海より五郎兵衛河
さわ舟千の川ほとりに京橋　丶
天和年中
俳諧集抄　青府
栗本山首気尉に秋ぞ時晩　一不
自紀師ぞ千歳一の戸の松　桃青
泊吉庵に月霞ハ坂をゆかもん
天和四甲子
芭蕉翁に香月と云字難之よし　李下
月と郭公を海に見食　芭蕉

枯枝に鴉のとまりたりや秋の暮　芭蕉
秋にうけゆく声此年里　素堂